

来ぶらり82

あなたの 一冊

誰かに勧めるわけでもなく、誰かに影響を与えるわけでもなく、
あなた自身が読んで認めた至高の一冊。

今回は、4人の方々に「あなたの一冊」を教えてくださいました。

「きょうも芸術」

本書は基本的な芸術論がわかりやすく書かれて
いるが、内容は芸術に留まらずわれわれの生活全
体に通じる話も多く含まれている。芸術を取り巻
く環境は50年以上前の発刊当時からは随分と変
わっているだろうが、今も昔も多くの人に読まれ
ているのは、時代や分野に左右されない物事の本質
を捉えているからであろう。

どんな環境にあっても、どんな仕事をしていても、
ぶれない考えを持っていたと思う自分にとって、
芸術以外にも通じる著者の考えは読む度に何かし
らの刺激を与えてくれる。今の自分が置かれている
状況に当てはまることがあれば、その時々で自分
でぼんやりと考えていることが何の曇りもない言
葉で表現されているために合点がいくことも多い。
常に前衛であり続けた著者の言葉は、いきいきと
した語り口調で十分な説得力を備えているので
ある。

「明日の神話」が公開されれば多くの人が訪れ、
「太陽の塔」が未だに様々な作品のモチーフにな
っているように、著者の作品は今も多くの人を魅了
し続けている。それは作品だけでなく、言葉もまた
同様に。

また暫くして読み返してみれば、新たな感じ方が
できるだろうから、この本との付き合いはこれから

も末永く続いていきそうだ。

■ 女子中・高等科事務室
／西村 圭



「今日の芸術」

岡本太郎著
講談社 1979
(大学図書館・書庫 708/29/1)

「社会の毒を中和する心の“漢方薬”」

小生の五十年に垂んとする読書生活を通じて、
至高の一冊として挙げたいのは、有名な中国の古
典の一つとされる『莊子』である。この本は、紀元
前3～2世紀頃に書かれたもので、本当の著者は
不明だが、瞠目すべき内容が記されている。その真
骨頂は、すべての価値序列や、物の間の区別は相
対的なもので、究極的認識の場においては一切成
立しえないとする点にある。小生は中高生の頃、と
あるキリスト教の学校で過ごしたが、学校当局が、
個々人がその個性に従って人格形成を目指すのが
教育だといいつつ、一方で、否応なく西洋文化の優
越性や学習成績その他の序列的評価を押し付けて
くることに辟易していた。そのときにこの本に出会
い、その立場に深い共感を覚え、自らを寄り添わせ
て、一方的に他者からの価値観や評価を押し付け

られる苦痛を乗り越ったのであった。今日のように、ビジネス（短期的金儲け）優先の発想がすべてをすりつぶしてゆく狂気の時代に、少なくともそんな価値観が絶対的なものではないのだことを確認するためのハンドブックとして、座右に備える意義のある書物だと思う。ちなみに、ノーベル賞受賞者湯川秀樹博士の中間子理論の発想の根底に、若い頃読んだ本書の影響があったというのは、博士自身が認める有名な逸話である。



■ 外国語教育研究センター教授

／馬淵昌也

『荘子』全4冊

金谷治訳注
岩波書店 1971-1983
(大学図書館・開架 081.2/337/456-459)

「私の一読必殺本」

友人に勧めたとしても、感動をわかちあうことはいかなしいかもしれない、そんな感慨を抱かせる本がある。私にとって佐藤亜紀氏の『バルタザールの遍歴』がそうだ。

舞台は20世紀初頭のウィーン、ハプスブルグの流れを汲む公爵家に生れた長男メルヒオールには、その肉体にもう一つの魂、バルタザールが生れ落ちたときから共棲していた。精神的双生児とも言うべき二人がたどる転落の第一歩が、彼らの母親の死である。この死の顛末に感じた衝撃は、いまだに忘れられない。人の死にはさまざまな形がある。しかし指一本触れさせず、また自ら動かすことなく、誇り高さのみで自死する、そんな死の有様に引き込まれた。筆者の研ぎ澄まされた簡潔だが雄弁な筆致は、その死を生みだした爛熟した貴族社会の終焉を描き、ナチスが台頭するウィーンの空気を肌身に知覚させる。

佐藤氏の処女作であるこの物語の衝撃は、私にとっては隕石の墜落に似ていた。だが、鋭利な刃物のような筆致が生み出す物語を、理解できず、投げ出す人もいだろう。私にとってその衝撃は、心に生涯残るクレーターを成し、氏のその後の作品も同様であっても、読書とは誰にも同じ感慨を抱かせるものでは

ない。それもまた、一興である。

■ 人文科学研究科哲学専攻2年

／平 礼子



『バルタザールの遍歴』

佐藤亜紀著
文藝春秋 2001
(大学図書館・開架 Bunshun/さ32/2)

「社会の多様性がイノベーションを生む」

みなさんは「コンピュータ」と「キャンディー」といった何を連想しますか？著者によればMacです。一見関係性がないと思われるようなものが結びつくとき、そこにイノベーションが生まれるのです。つまり、イノベーションとは「既知のもの」同士の、「思いがけない組み合わせ」による、新たな「創造」なのです。このように既知のもの（学問・文化など）が出会う場を、著者は「交差点」と呼び、この交差点でイノベーションが生まれることを「メディチ・エフェクト」と呼んでいます。

このメディチ・エフェクトは、私達の頭の中や組織の中で起こせます。つまり、個人レベルでは、絶えずさまざまな情報を収集し、これらを固定観念に囚われずに組み合わせ、自由な連想を繰り返すことで起こせます。そして、組織においては、異なる専門分野や文化的背景を持つ人が集うことにより、既存の概念がぶつかり合い、融合することにより起こすことができるのです。

日本で生活していると、Diversityの重要性などはほとんど意識する機会もなかったのですが、本書によって社会が進化するためには、自分とは異なる他者の考えを受け入れ、自説と融合させ、まったく新しい概念を創出することが重要であると認識しました。国際化の必要性が叫ばれる昨今、視野を広げるのに役立つ一冊かもしれませんね。

■ 大学図書館運用課

／稲垣幾世枝



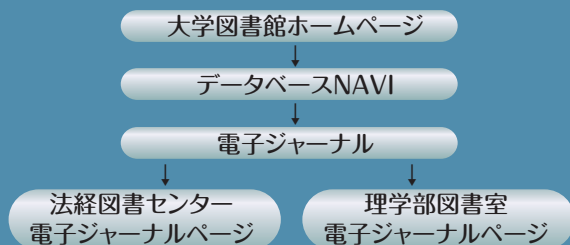
『メディチ・インパクト』

F. ヨハンソン著
ランダムハウス講談社 2005
(大学図書館・開架 335.81/104)

ご存知ですか？ 電子ジャーナル

学習院データベースNAVIでは、学習や研究に役立つ各種データベースを提供しています。雑誌論文を探したいー そう思ったら、電子ジャーナルにアクセスしてみませんか。コンピュータによる論文の検索と閲覧が一括して可能なシステムです。学習院大学では約1,900タイトルの電子ジャーナルを利用することができます。その中から、法経図書センターと理学部図書室が契約している電子ジャーナルをご紹介します。

ー アクセス方法 ー



法経図書センター電子ジャーナルページから

法経図書センターでは、冊子体に付属しているものを中心に、300タイトルほどの電子ジャーナルを提供しており、学内設置の端末であれば、誰でもアクセスできます。ただし、全ての号が使えるわけではなく、「Subscribed（購入済）」などの許可表示が出ている巻号のみ利用ができます。

このページでは主に外国語雑誌を掲載しており（日本語雑誌の電子ジャーナルの多くは、別ページになります）、政治、経済に関する学術雑誌が多く収録されています。法律分野については、判例検索のツールとセットで提供される場合が多いため、このページに掲

載されているタイトルは比較的少なめです。主に研究目的で利用されており、利用者は特定のタイトルではなく、幾つもの電子ジャーナルを複合的に使用することが多いようです。一般的な雑誌では、『Foreign Affairs』や『Economist』が利用できます。また、『Japan Forum』のような、外国語で書かれた日本研究の雑誌があるのが興味深いところです。

外国語のものばかりなのでなかなか利用の機会は少ないかもしれませんが、一度試しに覗いてみてください。この他にも何か新たな発見があるかもしれません。

■ 法経図書センター／岸 利幸

理学部図書室電子ジャーナルページから

理学部図書室では購入雑誌の9割を占める外国語雑誌で電子ジャーナルの世界が展開されています。現在、その8割を占める233タイトルの電子ジャーナルを提供中で、学内設置の端末（一部のタイトルは、理学部内設置端末のみ）であれば、誰でもアクセスできます。

特に、理学部では今年度から各学科とも従来の冊子体との併用購入から電子ジャーナルのみの購入へと切り替え始め、全体の3割近くが電子ジャーナルのみです。なかでも、今年度から開設された生命科学専攻では、全購入雑誌33タイトルにおいて電子ジャーナル利用可能で、このうち27タイトルは電子ジャーナルのみです。このほか、化学科でも半数以上が電子

ジャーナルのみで、特にアメリカ化学会（ACS）発行主要36タイトルが初号から利用可能なのはお薦めの1つです。

このように理学部で急速に広がっている電子ジャーナルですが、雑誌の全ての号が使えるわけではないため、利用可能な範囲については理学部図書室のホームページで確認し、冊子体との併用をお薦めします。

また、専門的雑誌ばかりではなく、自然科学の一般的雑誌『Nature』や『Science』も利用可能ですので、まずは、このようなところからアクセスしてみたいかがでしょうか。是非とも理学部にある貴重な資料を活用して新たな発見へ役立ててください。

■ 理学部図書室／橋本尚美

新規開設研究室

～ 記録を守り記憶を伝える アーカイブズ学専攻 ～

2008年4月、大学院人文科学研究科に日本初のアーカイブズ学専攻が開設されました。本専攻は東1号館8階に研究室を構え、社会人の方も履修しやすいように、夜間や土曜日にも開講しています。

「アーカイブズ」や「アーキビスト」はあまり聞き慣れない言葉かと思いますが、実は私たちの研究や生活に密接に関わる存在です。例えば、社会保険庁の年金記録問題を考えてみると、その要因は、記録台帳に記された情報と、それを元にしたコンピュータ記録の管理が杜撰だったことにあります。しかし、日本には、国や地方自治体の記録を統一的に管理する法律や仕組みは存在しないのが実状なのです（現在、公文書管理法案が検討されています）。法の整備とそれを運用する人間に自覚があり、正確な記録とその管理がなされていたならば、このような問題はおきなかったでしょう。

このような記録の管理を科学的・学問的に検討し、実生活のうえで適応させていくことがアーカイブズ学の目的のひとつでもあり、こうした作業を実際に専門的知識のもとに行なうのがアーキビストと呼ばれる人々です。本専攻はアーキビストを育成し、社会に送り出していくことも目的としています。

アーカイブズ学の成果は、国や地方自治体が行った行政の内容を、国民が検証するための手だてを提供することにもなるでしょうし、企業の経済活動のための材料としても活用されることになるでしょう。歴史資料として活用されることはいうまでもありません。また、デジタル処理されたうえでのウェブ上での公開なども、アーカイブズ学の範疇に入ります。つまり、アーカイブズ学は、人文系・社会系・情報系など様々な学問分野を支える存在といえるでしょう。

本専攻は、日本のアーカイブズ学を牽引し、世界水準の環境をととのえるべく、国内外で刊行されたアーカイブズ学関係図書や学術雑誌を収集していく予定です。貸し出し手続き等の詳細は、ホームページをご確認ください。

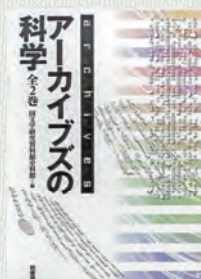
ご参考までにアーカイブズ学を知るための入門書を挙げておきます。是非、皆さんもアーカイブズの世界に親しんでみてください。

■ 人文科学研究科アーカイブズ学専攻副手／浅井千香子



『入門アーカイブズの世界』

記録管理学会・日本アーカイブズ学会共編
日外アソシエーツ 2006
(大学図書館・開架 015/76)
(アーカイブズ学専攻閲覧室・開架 015/76ア)



『アーカイブズの科学』全2冊

国文学研究資料館史料館編
柏書房 2003
(大学図書館・開架 015/55ア1-2)
(アーカイブズ学専攻閲覧室・開架 015/55イ1-2)



『草の根文書館の思想』

安藤正人著
岩田書院 1998
(大学図書館・開架 015/45/3)
(アーカイブズ学専攻閲覧室・開架 015/45イ/3)

「来ぶらり」のバックナンバーは(<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/glim/collection/library/raiburari.html>)で公開しています。

来ぶらり No.82 2008年10月1日発行

発行責任者：塩谷清人 編集委員：奥富美智代・米田岳史

学習院大学図書館 〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

☎03-3986-0221(代) 内2396(レファレンス) 内2397(閲覧) 03-5992-1009(閲覧直通)